

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の 代表者 (学 長)	(大学名)	法政大学	機関番号	32675
	(ふりがな<ローマ字>) (氏 名)	Hirabayasi 平林	Chimaki 千牧	

2. 大学の将来構想

【大学の将来構想】

本学はわが国において最も古い伝統をもつ私立の総合大学として、研究・教育分野における先進的役割を果たしてきた。21世紀においても、自由・進歩・進取の伝統のもと、「開かれた法政21」という将来構想を掲げて、戦略的に取り組むべき課題を設定した。すなわち、「ウェル・ビーイング(Well-being)」という基本コンセプトのもとに、国際化、先端科学技術、環境、情報化という四つの目標を打ち立てた。本学を、国際的・学際的な研究・教育拠点へと築き上げることが求められているのである。

【将来構想と本拠点形成】

この将来構想を実現するために、海外にアメリカ研究所、ロンドン・オフィス、チューリッヒ・オフィス等海外拠点を開設すると同時に、IT研究センターを中心に国際的なネットワークの構築をはかり、研究・教育体制の国際化と高度化とを推進している。21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」も、この将来構想の一翼を担うものである。このプロジェクトは、長年にわたる研究実績を誇る野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所、そして、2002年度開設の国際日本学研究所などの本学の研究機関を中心に、2003年度開設の大学院「国際日本学インスティテュート」とも連携しながら推進、展開されるが、既存の大学院の研究科、専攻の枠を越えた、横断的なプロジェクトであると同時に、世界各国の大学、研究機関との学術交流のネットワークを活用した国際的な研究プロジェクトでもある。その意味で、本学の人文・社会科学系の国際的・学際的な研究・教育の中核拠点を形成する。

本研究・教育拠点形成は、本学の国際戦略の強力な推進力となりうるばかりではない。既存の学問分野の枠組みにとらわれない、新しい学問領域に対応するという点でも、研究所との連携という新しい組織編成という点でも、先端的な研究型大学院のモデルとなることが期待され、それに全力を傾注している。

【マネジメント体制】

総長(学長)が強力なリーダーシップのもとにマネジメントを発揮する体制を整えるために、事業の管理・運営機関である、国際日本学研究所センターを、総長の直属機関である総長室に設置した。また、センター長、事務室長として、担当理事を配置した。担当理事は、拠点リーダーと定期的に事業活動の進捗状況などに関して情報交換を重ねると同時に、業務状況も点検しながら、研究・教育拠点形成の強化をはかっている。また同時に、財政上の援助を中心に、法人部門からの積極的な支援体制を確立している。

【重点的支援の実施】

21世紀COE事業推進支援のために、研究教育組織の改編が行われたが、具体的には、2002年国際日本学研究所、国際日本学研究所センターの設置(専任所員(教授)1名、専任職員2名、嘱託職員1名の配属)、大学院国際日本学インスティテュート(2003年度修士課程、2004年度博士課程)の設置などである。

それに伴い、国際日本学研究所センター・国際日本学研究所所員(教授)、大学院客員教授、任期付き教授、兼任講師の人件費、職員の人件費など、予算措置が講じられている。また、国際日本学研究所センター・国際日本学研究所専用の事務室、サーバー室、セミナー室、会議室、書庫、ならびに教員用研究室が整備されている。大学院国際日本学インスティテュートについても、在籍者用の共同研究室の設置、教員用研究室の設置など、施設・スペースの整備がなされている。

3. 達成状況及び今後の展望

【将来構想の達成状況】

「ウェル・ビーイング」という基本コンセプトのもとに、国際化、先端科学技術、環境、情報化という四つの目標を掲げて、キャンパスを国際的・学際的な研究・教育拠点へと築き上げるといふ、本学の将来構想は着々と実を結びつつある。

なかでも、本研究・教育拠点形成は、本事業活動の展開によって「国際日本学」という学問分野が認知されるようになったという事実からも窺えるように、学の内外、国の内外で、きわめて大きなインパクトを持った。国の内外の研究者・研究機関とのネットワークも有効に機能し、グローバルな規模での共同研究活動も順調に推進、展開されている。日本文化研究という観点から価値あるコンテンツを電子資料化(デジタル化)し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」も稼働し始めている。そうした活動のなかで、世界のトップクラスの外国人研究者を惹きつけるなど、研究・教育拠点としての求心力も高まり、本学の国際的プレゼンスを高める上で大きな成果をあげている。それは、国際日本学インスティテュートの留学生数の増加にも現われている。当初の目的である国際的な研究・教育拠点形成は、確実に達成されつつある。

【今後の展望】

とはいえ、本事業活動は現在未完のプロジェクトである。さらに将来に向けて、これまでの研究成果を広く活用するべく努力を傾注する。すなわち、これまで築き上げてきた、国際的かつ学際的な「国際日本学」の共同研究の実績のうえに、内外に張り巡らされたネットワークを有効に活用しながら、本事業活動をさらに推進し、発展させる。また、大学院国際日本学インスティテュートとも緊密に連携し、最新で最先端の研

究成果を大学院教育に生かすと同時に、若手研究者の育成をはかる作業を今後も継続していく。

2007年度より始まる「能楽研究者育成プログラム」も、本事業活動の延長上に位置づけられる。このプログラムでは、能楽理論、作品研究、資料研究などの基礎的な研究能力を高めるためのコースワークと、現代芸術としての能楽の意義を探究し、海外における能楽理解を究明するためのコースワークが設けられている。教育研究指導の面では、国際日本学インスティテュート、日本文学専攻、能楽研究所などに所属する教員が当たるが、こうした横断的な協力体制や、そこに国際的な視点を盛り込む方向も、本事業活動を進めるなかで着実に根づいてきたものである。

本事業活動を継続するために、大学として今後も予算措置を講じて、重点的に支援し、世界的拠点を形成していくという方針、姿勢は、今後もまったく変わらない。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	法政大学	学長名	平林 千牧	拠点番号	D17
1. 申請分野	A<生命科学> B<化学・材料科学> C<情報・電気・電子> D(人文科学) E<学際・複合・新領域>				
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	日本発信の国際日本学の構築 (Declaration of International Japan-Studies) →メタサイエンス(国内外の学問的対話)の方法確立に向けて→ ※副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)				
研究分野及びキーワード	<研究分野: 日本文化 >(異文化)(国際化)(ネットワーク)(メタサイエンス)(比較研究)				
3. 専攻等名	大学院国際日本学インスティテュート、人文科学研究科日本史学専攻、日本文学専攻、政治学研究科政治学専攻、国際日本学研究所、野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所				
4. 事業推進担当者	計 25名				
ふりがな<ローマ字> 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)		
(拠点リーダー) hoshino tutomu 星野 勉 katsumata hirosahi 勝又 浩 (aoki tamotu) 青木 保 kawamura minato 川村 湊 tanaka yuko 田中 優子 abiko shin 安孫子 信 wan min 王 敏 Josef kreiner ヨーゼフ・クライナー Gao Zeng Jie 高 増杰 Joesf. A. kyburz ジョセフ・A・キブルツ sawato hirosato 澤登 寛聡 nishino haruo 西野 春雄 yamanaka reiko 山中 玲子 Steven Nelson スティーヴン・ネルソン yasue takashi 安江 孝司	人文科学研究科哲学専攻 教授・国際日本学研究所所長 人文科学研究科日本文学専攻 教授 国際日本学研究所客員所員 早稲田大学教授 人文科学研究科日本文学専攻 兼任教授、国際文化学部教授 社会学部教授 人文科学研究科哲学専攻 教授 国際日本学研究所教授 国際日本学研究所客員所員 ボン大学日本文化研究所所長 国際日本学研究所客員所員 中国社会科学院日本研究所副 所長 教授 国際日本学研究所客員所員 フランス国立科学研究センター教授 人文科学研究科日本史学専攻 教授 人文科学研究科日本文学専攻 教授 能楽研究所所長 人文科学研究科日本文学専攻 国際日本学インスティテュート兼任教 授 能楽研究所教授 人文科学研究科日本文学専攻 文学部教授 沖縄文化研究所所長 法学部教授	哲学、倫理学 文学修士 日本近現代文学 文学修士 文化政策、文化人類 学 人間科学博士 文芸批評、日本近現 代近世文学、法学士 近世文学、比較文学 文学修士 フランス哲学・フランス思 想史 文学修士 日中比較・日本研究 人文科学博士 日本文化研究 文学博士 思想史、日本学 文学博士 文化人類学、民族学 宗教学 文学博士 日本近世史 文学博士 能楽研究 文学修士 文学博士 日本音楽史 芸術学士 社会学 社会学修士	全体統括: テーマタスクフォース①国際日本学の 理論構築とタスクフォース間の連携 (平成16年12月17日より就任) 副: テーマタスクフォース①国際日本学/理論的構築と タスクフォース間の連携 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)中国の日本文化 研究の総合的研究(平成17年1月20日より就任) 分担者: テーマタスクフォース①国際日本学の理論構築 とタスクフォース間の連携 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化研究の総合的研究 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化の総合的研究(平成17年1月20日より) 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化の総合的研究(平成17年1月20日より就任) 主: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日本文 化の総合的研究 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化の総合的研究 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化の総合的研究(平成16年1月14日より就任) 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化の総合的研究(平成17年1月20日より就任) 分担者: テーマタスクフォース②西欧(独・仏)・中国の日 本文化の総合的研究 主: テーマタスクフォース③世界の中の能楽 (平成17年1月20日より就任) 分担者: 分担者: テーマタスクフォース③世界の中の能 楽(平成17年1月20日より就任) 主: テーマタスクフォース④国際沖縄学の構築		

iida taizou 飯田 泰三	政治学研究科政治学専攻 法学部教授	日本政治思想史 法学士	副:テーマスクワース①国際日本学の理論構築とタスクワース間の連携、副:テーマスクワース④国際沖縄学の構築
yoshinari naoki 吉成 直樹	沖縄文化研究所教授	社会学 社会学修士	分担者:テーマスクワース④国際沖縄学の構築 (平成17年1月20日より就任)
Nakano Hideo 中野 榮夫	元人文科学研究科日本史学専攻・ 教授/元国際日本学研究所長	日本古代中世史 文学修士	平成16年12月15日辞職
Ronald Dore ロナルド・ドーア	国際日本学研究所客員所員	日本社会史	平成15年年11月5日辞退
Levy Hideo リービ・英雄	LSE応用経済研究所長 国際文化学部教授	学士(近代日本学) 日本文学 Ph.D.	平成17年1月20日交替
Konstantin sarkisov コンスタンチン・サルキソフ	国際日本学研究所客員所員 法学部兼任講師/ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員	日露研究、日本のアジア外交 Ph.D.	平成17年1月20日交替
Vadim klimov ヴァディム・クリモフ	国際日本学研究所客員所員 サンクトペテルブルグ大学東洋学部教授	日本中世史 Ph.D.	平成17年1月20日交替
Che Sanyong 崔 相龍	国際日本学研究所客員所員/高麗 大学校亜細亜問題研究所長、元高麗 大学校平和研究所長	西洋清治哲学、平和 研究、日本政治	平成17年1月20日交替
Hsu Chieh-lin 許 介麟	国際日本学研究所客員所員/台湾 大学教授、日本総合研究所主宰	政治学博士、政治学 、日本学、法学博士、	平成17年1月20日交替
Rosa Caroli ローザ・カローリ	国際日本学研究所客員所員/ベネチア 大学東アジア研究所・副教授	文化人類学、民族学 宗教学、文学博士	平成17年1月20日交替

5. 交付経費（単位：千円）千円未満は切り捨てる（ ）：間接経費						
年 度(平成)	1 4	1 5	1 6	1 7	1 8	合 計
交付金額(千円)	70, 000	77, 000	59, 100	16, 000 (1, 600)	15, 413 (1, 541)	240, 654

6. 拠点形成の目的

「日本発信の国際日本学の構築」を目指す本拠点形成の基本コンセプトは、「異文化研究としての日本学」である。この基本コンセプトのもとに、国内外の日本文化理解の共通の基盤を探究し、国際的に通用する日本学を構築すること、これが本拠点形成の目的である。

ところで、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」ともて囃された頃ほどではないが、外国から日本や日本文化に寄せられる関心は依然として高い。こうした外国の人々の眼差しのなかに、日本や日本文化の思いもよらない面を発見したり、気づかされたりすることもしばしばある。しかし、外国の人々の熱い眼差しに対して、専門の研究者は概して冷淡である。「日本文化は日本人にしか分からない。だから、外国人の日本文化研究から学ぶべきものはない」というような言い方にも認められるように、わが国の日本文化研究は、どちらかと言えば、方法論的な意識が希薄で、しかも、内向きの志向が強く、外国の研究者に対して必ずしも開かれたものとなっていない傾向がある。ここに、国の内外に開かれた「日本発信の国際日本学」の構築が必要とされる理由がある。

1) 「国際日本学」の構築へ向けての方法論の確立

「国際日本学」を構築するにあたり、まずもって「自文化」を「異文化」視するというスタンスをとる。外国の日本学研究者は当然日本文化を「異文化」として取り上げるわけであるが、そのような外からの視点を取り入れることによって、私たちの内からの視点を相対化し、自文化研究が陥りがちな狭隘さからの脱却をはかるのである。さらにまた、この開かれた研究姿勢のもとに、学問分野を異にする内外の日本学研究者による学問的な対話の実践を通じて、日本文化についての理解内容の差異、内と外の視点の差異を際立たせると同時に、その差異の意味の解明をはかる。これは異文化間対話の成立する条件を探究するというメタサイエンスに従事することを意味するが、それは「国際日本学」の方法論を確立するためにほかならない。

このように、「国際日本学」という新しい学問を、専門を異にする内外の日本学研究者が共同で構築することを通じて、内向きの閉鎖的な研究姿勢と希薄な方法意識という、わが国の人文科学研究の旧弊を打破し、人文科学における、国際的・学際的な共同研究のあるべきモデルを提示することも目指している。

2) 日本文化研究の新展開

日本文化研究にあたり、「異文化」という観点から日本文化を眺め直して見ると、安易に「日本」というかたちでひと括りすることを許さない、国境を越えた拮据りや歴史的な積み重なりのもとに、日本文化が驚くほど多様な相貌を呈してくることに驚かされる。

日本を「異文化」として対象とする外国の日本学研究には、「比較」の視点が必ず含まれているが、この「比較」の視点（とりわけ、日中、日独、日仏比較の視点）から、差異性と同一性とに注目しながら日本文化を捉え直すことによって、日本文化のこれまでとは異なる新しい局面を再発見、再発掘することができる。

本学にはすでに「野上記念能楽研究所」と「沖縄文化研究所」での長年にわたる研究蓄積があるが、これをより広範な日本文化研究のための糧とする。具体的には、「世界無形遺産」に認定された「能楽」を「国際日本学」という枠組みのなかに位置づけ、「比較」の視点から捉え直すことによって、世界的観点から「能楽」研究の新しい局面を切り拓く。また、南の境界領域である「琉球・沖縄」に目を向けることによって、日本文化が、均一で同質的な「ひとつの文化」ではなく、中国、朝鮮などのアジア地域へと越境する、多元的な「異文化」起源と多重な構造を有する「いくつもの文化」であることを解明してきた。

3) 「電子図書館システム」の構築

国の内外の研究者・研究機関とのネットワークを有効に活用し、リアル・タイムで研究情報を共有して、グローバルな規模での共同研究活動を推進する。そのために、日本文化研究という観点から価値あるコンテンツを電子資料化（デジタル化）し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」の構築をはかっている。

4) 発信能力のある「日本学」研究者の育成

「日本発信の国際日本学の構築」という COE 事業活動のなかで、若手研究者の研究支援を制度化することによって、同時にまた、この事業活動によって得られた最新で最先端の研究成果を国際日本学インスティテュートでの大学院教育に生かすことによって、発信能力のある「日本学」研究者の育成に務めている。

7. 研究実施計画

【拠点組織】

本拠点形成事業は、「国際日本学研究所」、「野上記念能楽研究所」、「沖縄文化研究所」など本学の研究機関を中心に、教育機関である大学院「国際日本学インスティテュート」とも緊密に連携しながら、推進される。そして、この事業全体を統括する機関が、「国際日本学研究センター」である。

【研究課題】

「日本発信の国際日本学の構築」をめざす本拠点形成の基本コンセプトは、「異文化研究としての日本学」である。

その主要な課題の一つは、「異文化研究」という視点を導入することによって、したがって、外国の日本学研究者と共同で、内外に開かれた日本学研究のスタンダードを確立することである。それゆえ、方法論を確立するための学問的実践とメタ・レベルの研究を積み重ねることが、研究実施計画を立てるにあたり重要な柱の一つとなる。

もう一つの課題は、「異文化」という観点から日本文化を再発見、再発掘し、日本文化研究に新局面を切り拓くことである。とりわけ、「世界無形遺産」に認定された「能楽」と南の境界領域である「琉球・沖縄」に目を向けることによって、日本文化の特性と特殊を突き抜けて普遍に繋がるものを探求することになるが、これが研究実施計画を立てるにあたりもう一つの柱となる。

【研究実施計画】

研究課題を次の四つのタスクフォースで分担する。

◆タスクフォース①：国際日本学研究センター担当

課題：「国際日本学」の構築とタスクフォース間の連携

1. タスクフォース②と連携しながら、「国際日本学」の枠組みづくりと方法論の確立に向けたメタ・レベルの研究に、外国の日本学研究者と共同で取り組む。
2. 事業推進担当者全体会議を通じて、タスクフォース間の連携と問題意識の共有化をはかる。
3. 国の内外の研究者・研究機関とのネットワークと「電子図書館システム」を構築する。

◆タスクフォース②：国際日本学研究所担当

課題：外国（当面は中国・ドイツ・フランスに限定）の日本文化研究の総体的研究（分析・評価）

1. 外国の日本文化研究を分析・評価する。
2. 日本認識の差異（ずれ）を究明する。
3. 異文化理解、異文化間対話の可能性を探る。

◆タスクフォース③：野上記念能楽研究所担当

課題：世界の中の能楽

1. 外国の多角的な能楽研究の成果を手がかりとして、能楽そのものに対する新たな知見の創出とさらなる理論の深化をはかる。
2. 貴重資料と研究成果のデジタル化による発信をはかる。

◆タスクフォース④：沖縄文化研究所担当

課題：国際沖縄学の構築

1. 琉球・沖縄の基層文化形成と文化的アイデンティティの研究を推進する。
2. 「国際日本学」構築のための戦略的拠点として国際沖縄学を構築する。

【研究実施計画にあたっての留意事項】

1. 拠点リーダー、各タスクフォース・リーダーのコーディネーターとしての役割を明確化すると同時に、研究課題および研究方法の共有化を通じて、タスクフォース間の連携を強化する。
2. 「国際日本学」の構築と方法論の確立に向けての理論研究（メタサイエンス）を強化する。
3. 能楽、琉球・沖縄に関する研究を「国際日本学」という観点から捉え返すことによる新たな知見の創出とさらなる理論の深化を目指す。
4. 外国の日本文化研究をテーマとしたシンポジウムを、その場限りのものにするのではなく、その成果を積み上げ、集約していくなかで、従来の研究にはない新たな知見を創出していく。
5. 研究成果を順次、『研究叢書』として刊行する。

8. 教育実施計画

【教育体制としての国際日本学インスティテュート】

「日本発信の国際日本学の構築」を目指す本拠点形成において、研究拠点形成と併行して、教育拠点としては、本学大学院「国際日本学インスティテュート」（修士課程：2003年度開設、博士課程：2004年度開設）を展開している。

◆教育理念

「国際日本学の構築」とは、従来の日本社会・文化に関する諸領域の研究が意識的・無意識的に前提としてきた知見、判断基準、方法などを相対化し、国際的な視野のもとに再構築することにほかならない。本学大学院「国際日本学インスティテュート」はこのような問題関心のもとに研究活動を行う次代の研究者を育成することを教育理念として設置されている。

つまり、大学院「国際日本学インスティテュート」は、既存の専門分野の枠にとらわれずに、広く国際的な角度から日本を研究する若手研究者の育成を体系的に行うことを目指している。

◆教育組織

大学院「国際日本学インスティテュート」は、人文科学研究科に属する日本文学、日本史学、地理学の3専攻、政治学、社会学の2研究科が拠出する教員と学生定員とによって構成される、横断的なインスティテュート組織である。

2003年度開設の修士課程においては、開設科目は、演習などインスティテュート独自の科目が約20、3専攻、2研究科がインスティテュート用に設置する科目が約40あり、これが6群（内訳は、1群：国際日本学、2群：アジアの中の日本、3群：伝統文化と民衆文化、4群：風土が作る文化、5群：もう一つの日本文化、6群：日本の美と芸能）に振り分けられ、特色あるカリキュラムを編成している。

また、外国から優れた研究者を迎え、国際的にも高い水準の教育を可能とするプログラム（「世界の日本論と日本学」）を用意している。このようにして、外国からの留学生を受け入れる環境も整え、国際的な展開を果たしつつある。さらに、2004年度開設の博士課程においては、学生が外国に出て行くインターンシップ制度を導入し、外国の関連機関での実習も推奨しているが、そのための費用補助も行っている。

◆博士課程の教育方針

博士課程における研究活動は各人の意思に委ねられる範囲が広いとはいえ、「国際日本学インスティテュート」の設立目的に基づいて若干の作業を義務づけている。すなわち、伝統的な日本関係諸学における研究方法と諸前提とを相対化するために、外国における当該領域、当該研究対象に関する研究成果を歩査し、つき合せることがそれである。基礎的な作業として、アメリカ諸大学に提出された博士論文題目一覧から関係論文を拾い出し目録を作成することを課している。

【研究支援制度】

国際日本学研究所は、「国際日本学インスティテュート」および、それを構成する3専攻、2研究科の博士課程に在籍する若手研究者の研究活動を支援するべく、「学術研究員」制度を設けている。「学術研究員」は、国際日本学研究所の研究活動に参加するほか、年間1本の論文作成が義務づけられている。「学術研究員」に対しては、一人当たり年間20万円の研究奨励金が支給されている。

また、若手研究者の研究業績を発表する機会を保障するために査読付きの『国際日本学研究所紀要』を刊行する。

なお、ポスドク、学外、国外の若手研究者に対しては「客員学術研究員」制度がある。

【研究活動と教育活動の連携】

「日本発信の国際日本学の構築」というCOE事業活動によって得られた研究成果を国際日本学インスティテュートでの大学院教育に生かすような連携によって、発信能力のある「日本学」研究者の育成をはかる。

そのためにも、「国際日本学」のディシプリンと方法論の確立が求められている。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

研究教育拠点形成の目的をどれだけ達成できたかを自己評価すれば、2. 想定どおりの成果を上げた、ということになる。

「評価委員会」（委員長：樺山紘一、委員：山折哲雄、足立原貫、外間守善）による外部評価によれば、プログラムの全体評価は「研究目的について十分に達成できている」というものであった。その一部を以下に引用する。

「当初にあって構想された諸テーマは、研究の進行とともに、想定外の広がりや深まりを達成するものと、逆に予想外の行き詰まりをきたすものが、並存するのは当然のことである。そのなかで、能楽の国際的視点からの研究のように、今後の有為な展開を期待させるものが発掘できたのは、なかでも大きな成果として評価できる。海外の研究を反映させる形での研究の中心的なセンターとなる十分な基礎ができたといえるのではないか」。

以下は、以上のように判断する根拠となる目的の達成状況についての概略である。

1. 「国際日本学」の構築へ向けての方法論の確立

2005年12月1～3日、パリ日本文化会館を会場に開催された国際シンポジウム「日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究—」、2006年11月18、19日、法政大学を会場に開催された国際シンポジウム「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」、2006年12月15～17日、法政大学を会場に開催された国際日本学研究集会「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か」などにおける、内外の日本文化研究者との共同作業を通じて、「国際日本学」の構築に向けて、着実な一歩を踏み出しつつある。

日本を「異文化」として対象とする外国の「日本学」研究には、比較文化の視点が含まれている。比較の視点を生かした「反照的原理 (reflective principle)」（Josef. A. Kyburz）は、事例研究を経て、「国際日本学」の方法論として有効性が確かめられつつある。

また、わが国において「翻訳」を通じて異文化が受容されてきた事実に着目し、そこで生起している事態の解明を通じて、異なる「準拠枠（＝意味コード）」間での文化理解、文化伝達の可能性を、外国の日本文

化研究者と共同で探究した。そのさい、問題意識を共有する外国の日本文化研究者との共同研究を通じて、異文化理解、異文化間対話の現場に身を置きながら、その現場から理論構築をはかると同時に、その現場で理論を検証するというやり方を採用した。こうした作業は、「関係性の解釈学」（Shingo Shimada）という理論的な裏づけも得て、内外に開かれた「国際日本学」の構築に向けて実を結びつつある。

2. 日本文化研究の新展開 —「比較」の視点の導入による日本文化の再発見、再発掘—

1) 外国の日本文化研究の総体的研究

シンポジウム、ワークショップ、定例の研究会などを積み重ねるなかで、着実に研究成果を上げている。

なかでも、日中の比較文化研究は、日本文化を、中国をはじめとするアジアのなかに改めて位置づけ直すと同時に、比較文化の視点からアプローチすることによって、日中文化の同質性と異質性とを解明しつつ、日中相互の理解の可能性を探りつつある。学術研究でありながら、時代の要請にも応えるタイムリーな研究でもあり、内外からの注目度も高い。また、それに連動して、中国における日本文化研究の中心的な大学・研究機関とのネットワーク作りも着実に進行している。

また、独仏を中心とするヨーロッパの日本文化研究については、文化人類学の領域における中部ヨーロッパのドイツ語圏と日本との交流についての研究を展開すると同時に、文献学的なアプローチを中心とした伝統的な「日本学」や地域研究としての社会科学的な日本研究に加え、博物館・美術館資料を視野に入れた、総合的な日本文化研究を、新たなパラダイムとして提唱している。

2) 世界の中の能楽

能楽に関する研究が、改めて「国際日本学」という枠組みのなかに位置づけられることによって、新たな問題意識、方法意識が惹起され、これまで以上に開かれた姿勢とも相俟って、これまでにはない新たな展開を見せ始めている。それは、2006年12月15、16、17日に開催された国際日本学研究集会「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か」における内外の能楽研究者の白熱した議論と対話とのうちに認められる。また、能の翻訳を考えることが、ことばや文学そのものについて考えること、あるいは、文化伝達の問題等にも繋がっていくことをも示唆して、もう一つの国際シンポジウム「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」と響き合うものであった。

3) 国際沖縄学の構築

沖縄・琉球研究に関しては、外国の沖縄研究者の外の視点、沖縄の沖縄研究者の内の視点、そして、奄美そして本土の沖縄研究者の内でもなければ外でもない視点を交差させることによって、「いくつもの琉球・沖縄像」を浮かび上がらせた。また、「日本の中の異文化」として位置づけるならば、琉球・沖縄の文化は、言語の共通性など日本文化との同質性を孕みながら、アジアへと越境するところに異質性を認めることができるが、そこにまた日本文化の重層的で多様なあり方の、一つのモデルを認めることもできる。

3、「電子図書館システム」の構築

日本研究という観点から価値あるコンテンツを電子資料化（デジタル化）し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」を構築する作業は順調に進んでいる。

とりわけ、能番組のデータベース公開に引き続き、能楽研究所、鴻山文庫等所蔵の貴重資料の画像公開も開始した。総数50,000冊に及ぶ能楽関連資料のうち、室町時代の写本等特に貴重なものからデジタル化し、国の内外に向けて発信する作業を行っている。また、2005年度からは、コーネル大学主導の GloPAC (Global Performing Arts Consortium) にも正式なメンバーとして参加し、能楽関係のデータベース作成に協力している。

4、発信能力のある「日本学」研究者の育成

「国際日本学インスティテュート」は、修士課程設立以来4年、博士課程設立以来3年を経たが、その間留学生の増加に見られるように、教育拠点として機能し始めている。また、このインスティテュート経由で、これまで教育機関をもたなかった能楽研究所や沖縄文化研究所が若手研究者を取り込みつつある。さらに、従来の学問的な枠組みを超えたテーマに取り組む、発信能力のある若手「日本学」研究者が生まれつつある。

学術研究員および研究奨励金制度の導入、学術研究員研究会の開催、紀要『国際日本学研究』の刊行なども一定の効果を生み出しつつある。それは、研究成果としての紀要論文、シンポジウム、ワークショップ、研究会などでの研究発表などに顕著に認められる。

研究所での研究活動を大学院インスティテュートでの教育活動にフィードバックしつつ、両者のより組織立った連携も軌道に乗りつつある。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

COE事業活動への大学院生を主体とする若手研究者

の参画とそれを通しての教育活動とはほぼ順調に展開された。「国際日本学インスティテュート」の設置と運営は、そのために有効に機能した。シンポジウムや研究会への積極的な参加を求め、報告と論文執筆をうながしたこと、そして、何よりも外国の日本学研究者を交えたCOE事業活動自体が、若手研究者に有効な刺激を与えたと思われる。なかでも、中国、韓国など近隣アジア諸国からの留学生を加えることによって、「国際日本学」に適切な環境が整うことにもなった。

たとえば、2006年12月に開催された国際日本学研究集会「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か」における大学院生の研究発表は、英訳を通して能作品を読むことで手に入れた新たな視点をそれぞれに生かしており、作品研究の新しい方法論の可能性を示すものであった。

2007年度より始まる「能楽研究者育成プログラム」も、本COE事業の延長上に位置づけられるものである。このプログラムでは、能楽理論、作品研究、資料研究などの基礎的な研究能力を高めるためのコースワークと、現代芸術としての能楽の意義を探究し、海外における能楽理解を究明するためのコースワークが設けられている。研究指導の面では、国際日本学インスティテュート、日本文学専攻、能楽研究所に所属する教員が当たるが、こうした横断的な協力体制や、そこに国際的な視点を盛り込む方向も、COE事業を進めるなかで着実に根づいてきたものである。

3) 研究活動面での新たな分野の創成と、学術的知見等

1、「国際日本学」という新たな学問分野の明確な方法意識のもとでの確立

異文化の接触・転移がそこでおこなわれる「翻訳」に注目し、そこから共約不可能性の場面で関係性を創り出す学問的な実践として、「国際日本学」という新たな学問分野を創成する方向を示しえたのではないかな。これは、日本文化研究の国際化を果たすものであると同時に、異文化理解、異文化間対話の可能性に理論的根拠を与えるものである。

また、文化の比較という点でも視点の比較という点でも批判的かつ創造的な意味をもつ「比較」を「国際日本学」の方法論として確立する方向を示しえたのではないかな。

2、日中比較文化研究の新展開

日中比較文化研究は学術研究でありながら、時代の要請にも応えるタイムリーな研究でもあり、内外からの注目度も高い。

3、能楽研究の国際化

能楽研究の国際化は、本学が擁する貴重な研究資源と内外のネットワークとを活用することによって、注目に値する成果を収めることができた。能の「翻訳」を研究の主題とすることによって、能における日本文化の表層と深層との分別が可能となり、また内外からの「読み」を通して能に対する複眼的な研究への道も拓かれたかに見える。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

拠点リーダー、各タスクフォースのリーダーのコーディネーターとしての役割を明確化すると同時に、研究課題および研究方法の共有化を通じて、タスクフォース間、事業推進担当者相互の有機的連携をはかることとした。

1、月一回の事業推進担当者会議の開催

月一回事業推進担当者会議を開催し、情報・意見交換を通じて、タスクフォース間、事業推進担当者相互の有機的連携と研究内容の相互的な点検とを実施した。

2、『ニューズ・レター』の年3回の定期的な発行

事業推進担当者がそのつど事業内容の全容を掌握するとともに、それを周知するために『年報』に加えて、『ニューズ・レター』を年3回定期的に発行した。

3、研究会およびシンポジウムの開催

「国際日本学」とは何であるか、その概念内容の明確化と方法論の確立に向けての研究会を、2005年12月パリ・シンポジウムの前後に集中的に行った。2006年11月18、19日に開催した国際シンポジウム「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」は、明確な目的意識に支えられた一連の研究活動を文字通り締めくくるものであった。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

「開かれた法政21」という将来構想の柱の一つに、学際的で国際的な研究・教育拠点の構築がある。本COE事業活動はこの構想の一翼を担うものと位置づけられる。これは既存の大学院の専攻、研究科の枠を越え、付置研究所などとの連携を見据えた、横断的な研究プロジェクトである。と同時に、世界各国の大学、研究機関との学術交流のネットワークを活用した国際的な研究プロジェクトでもある。また、この研究プロジェクトを基礎として開設された、国際日本学インスティテュートは、既存の学問枠にとらわれない、新しい学問領域に対応するもので、将来の「研究型大学院」の雛形となるものである。

6) 国内外に向けた情報発信

国の内外の研究者・研究機関とのネットワークを有効に活用し、リアル・タイムで研究情報を共有して、グローバルな規模での共同研究活動を推進している。

また、日本文化研究という観点から価値あるコンテンツを電子資料化（デジタル化）し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」を構築する作業は順調に進んでいる。

7) 拠点形成費等補助金の使途について（拠点形成のため効果的に使用されたか）

拠点形成費等補助金の使途については、事業推進担当者会議に必ずはかり、本拠点形成の趣旨にかなった効果的な使用を心がけた。とりわけ、中間評価を受けての拠点リーダー交代以降は、当事業の補助金の使途に関して、厳正かつ厳格に対処した。

②今後の展望

事業活動は未完のプロイジェクトとも言えるので、さらに将来に向けて、これまでの研究成果を広く活用するべく努力を傾注する。すなわち、これまで築き上げてきた、国際的かつ学際的な「国際日本学」の共同研究の実績のうえに、内外に張り巡らされたネットワークを有効に活用しながら、この事業をさらに推進し、発展させる。また、大学院国際日本学インスティテュートとも緊密に連携し、最新で最先端の研究成果を大学院教育に生かすと同時に、若手研究者の育成をはかる作業を継続する。

2007年度より始まる「能楽研究者育成プログラム」も、事業活動の延長上に位置づけられる。このプログラムでは、能楽理論、作品研究、資料研究などの基礎的な研究能力を高めるためのコースワークと、現代芸術としての能楽の意義を探究し、海外における能楽理解を究明するためのコースワークが設けられている。研究指導の面では、国際日本学インスティテュート、日本文学専攻、能楽研究所などに所属する教員が当たるが、こうした横断的な協力体制や、そこに国際的な視点を盛り込む方向も、この事業を進めるなかで着実に根づいてきたものである。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

本事業活動の展開によって、「国際日本学」という学問分野が学の内外、国の内外で認知されるようになった。ちなみに、明治大学では2008年度に「国際日本学部」を開設する予定であると聞いている。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	法政大学	拠点番号	D-17			
拠点のプログラム名称	日本発信の国際日本学の構築 -メタサイエンス(国内外の学問的対話)の方法確立に向けて-					
1. 研究活動実績						
この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】						
・事業推進担当者(拠点リーダーを含む)が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等(著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの) ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの						
著者名(全員)、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年(西暦)の順に記入 波下線() : 拠点からコピーが提出されている論文 下線() : 拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生						
星野 勉 ・「『日本研究』の研究(メタサイエンス)の理論的構築に向けて」(『国際日本学』第3号、17-43頁、2005年3月) ・「異文化理解の可能性をめぐって-日本文化研究の方法論をめぐる考察-」(『国際日本学研究叢書2』法政大学国際日本学研究センター、33-69頁、2005年11月) ・「『菊と刀』にみる「恥」の文化」(『国際日本学』第4号、法政大学国際日本学研究センター、19-37頁、2007年3月) ・「和辻哲郎の哲学のポテンシャル」(『日本学とは何か-ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究-』『国際日本学研究叢書6』、法政大学国際日本学研究センター、2007年刊行予定) ・「『国際日本学』とは何か-「翻訳」から見えてくるもの-」(『国際日本学』第5号、国際日本学研究センター、2007年刊行予定)						
勝又 浩 ・「国際日本学の構築に関する二、三の考察」(『国際日本学研究叢書2』法政大学国際日本学研究センター、165-181頁、2005年12月) ・「不義と屈辱—戦後文学とアメリカ」(『季刊文科』33号、108-118頁、2006年1月) ・「滞日日記の半世紀—戦後文学アメリカ」(『季刊文科』34号、286-196頁、2006年4月) ・「廃墟の力—戦後文学とアメリカ」(『季刊文科』35号、174-184頁、2006年7月) ・「沖縄—戦後文学とアメリカ」(『季刊文科』36号、178-186頁、2007年1月)						
青木保 ・『多文化世界』(岩波書店、228頁、2003年7月) ・『東アジア共同体と日本の針路』(青木保、伊藤憲一、日本放送出版会、318頁、2005年11月)						
川村湊 ・「補陀落」(単著、作品社、222頁、2003年) ・「歴史としての天皇制」(共著、川村湊、網野善彦、吉本隆明、作品社、290頁、2003年) ・「村上春樹をどう読むか」(単著、作品社、230頁、2006年12月)						
田中優子 ・『江戸を歩く』(単著、講談社、206頁、2005年) ・『樋口一葉「いやだ!と云ふ」』(集英社、206頁、2004年) ・「共視論」(共著、北山修、田中優子、やまだようこ、遠藤俊彦、三浦佳世、山口裕幸、黒木俊秀、中村俊哉、234頁、2005年) ・「くるわ・もうひとつの都市空間」(『環(かん)Vol.17』藤原書店、138-145頁、2004年4月) ・「木綿から見たアジアと日本」(『アジア太平洋研究』№30、成蹊大学アジア太平洋研究センター、1-20頁、2006年)						
安孫子 信 ・「趣味の国民性をどう扱うか—九鬼周造の日本、ベルクソンのフランス—」(『国際日本学研究叢書2』、法政大学国際日本学研究センター、151-163頁、2005年12月) ・「西周とオーギュスト・コント—西周における哲学の像」(『法政哲学』第2号、法政哲学会、39-56頁、2006年5月) ・「Amane nishi et augste comte- le probleme de la classification des sciences-」(『国際日本学』第4号、法政大学国際日本学研究センター、39-56頁、2007年3月)						
王 敏 ・『なぜ噛み合わないのか—日中相互理解認識の誤作動』(日本僑報社、143頁、2004年4月) ・『「意」の文化と「情」の文化—中国における日本研究』(編著、中公叢書、9-19頁、431-535頁、370-435頁、2004年10月) ・「異文化アプローチによる日中相互認識の「ズレ」考察」(『国際日本学研究叢書2』法政大学国際日本学研究センター、71-121頁、2005年12月) ・「中国における日本研究の研究を中心に—国際日本学研究方法論討論」(『国際日本学研究叢書3』法政大学国際日本学研究センター、317-339頁、2006年3月) ・「「変節」から読み解く日本文化」(『国際日本学』第5号、国際日本学研究センター、2007年刊行予定)						
ヨージェフ・クライナー ・「japanese collections in European museums.reports from the Toyota-foundation」 symposium konigswinter 2003 第1巻 general prospects ;第2巻 regional reports(=japan archiv;5/1-2) bonn:bier 'sche verlagsanstalt 18+256頁、14 + 796頁 some remarks on japanese collections in europe 第1巻 1-75頁 European collections from ryukyu /Okinawa 第1巻 117-127頁 ・(Ed):japanesness versus ryukyuanism. Papers read at the fourth international conference on Okinawa studies, bonn venue ,march 2002(=jaoan archive;第8巻) bonn:bier 'sche verlagsanstalt 2006 203頁 ・その中で: introduction some thoughts on ryukyuan history and historiography. 3-15頁 ・「ドイツ語圏における日本研究の現状」(編著、法政大学国際日本学研究センター、135頁 2006年6月) ・kaempfer und das europaische jaoanbild in:s.klocke-daffa,j.scheffler,G .Wilbertz(eds.)Engelbert kaempfer(1651-1716)und die kulturelle begegnung zwischen Europa und Asien.(=Li頁ische Studien;第18巻).Lemgo 245-263頁、2003) ・Umesato Tadao 's Civilization-Theory,Viewed in the Historical Context of Japanese Anthropological Science.						

In: Bulletin of the National Museum of Ethnology 第29巻第1号、1-20頁、2004

高 増杰

- ・『日本発展報告』（編著、社会科学文献出版社、1-444頁、2002年7月）
- ・「西欧的世界観の受容と改造」（慶応大学出版会『西洋思想の日本的展開』、11-33頁、2002年9月）
- ・「近代初期東西文化衝突探索」（世界知識出版社『近世中日思想交流論集』、395-412頁、2003年10月）
- ・「日本文化研究史上の革命—日本学研究の方法論に関する思索—」（『国際日本学』第2号37-52頁、2005年3月）

ジョセフ・キブルツ

- ・『La reponse de Maruyama Okyo au Titien』（cioango NO.13. 7-48頁、2006年）
- ・「ことばを越えて—円山応挙の西洋へのまなざし」（『国際日本学研究叢書7』、法政大学国際日本学研究センター、2007年刊行予定）

澤登 寛聡

- ・『江戸時代古文書・古記録（文字情報）の発生・伝達・管理に関する基礎的研究』（＜わが国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究＞研究成果報告書（文部科学省特定領域研究 課題番号16918102）、編著、澤登寛聡、神立孝一、大友一雄、1-275頁、2006年3月）
- ・「＜近世日光の祭祀と儀礼＞の報告に関する覚書」（『国史学』、第30号、國學院大學国史学会、99-105頁、2006年11月）
- ・「国史と日本史の差異—18-19世紀の日本における一揆・祭礼の集合心性と秩序—」（『国際日本学研究叢書7』国際日本学研究センター、2007年刊行予定）

西野 春雄

- ・「世界の中の能—外国人の能楽発見—」（『国際日本学』第1号、法政大学国際日本学研究センター、93-117頁、2003年10月）
- ・「日本美術史家フリート・リッ・ヘルプス—研究(1)」（『能楽研究』第26号、野上記念能楽研究所、202-233頁、2002年3月）
- ・「日本美術史家フリート・リッ・ヘルプス—研究(2)」（『能楽研究』第27号、野上記念能楽研究所、176-209頁、2002年3月）
- ・「音の劇詩人観世元雅」（『国際日本学』第2号、法政大学国際日本学研究センター、31-59頁、2005年3月）
- ・「桂坂謡曲談義」（『日文研叢書37』国際日本文化研究センター、編著、ジェイ・ルビン・田代慶一郎・西野春雄、149頁、2006年3月）

山中 玲子

- ・「外国人による＜富士山研究＞」（『国際日本学』第3号、法政大学国際日本学研究センター、117-137頁、2005年3月）
- ・「伝統と同時代性—能楽研究の国際化は可能か」（『国際日本学研究叢書8』、法政大学国際日本学研究センター、97-118頁、2007年6月）
- ・「reiko YAMANAKA, 『THE TALE OF GENJI AND THE DEVELOPMENT OF FEMALE-SPIRIT NO PLAYS』(The Tale of Genji in japan and the WORLD:socal imaginery,media and production.2007刊行予定)」

スティーヴン・ネルソン

- ・「ワークショップ報告-英訳<千手>を読む—」（『国際日本学研究叢書8』、法政大学国際日本学研究センター、253-286頁、2007年6月）
- ・「古典文学作品の解釈—訳者は何を指すべきか—」（『国際日本学研究叢書7』、法政大学国際日本学研究センター、2007年刊行予定）

安江 孝司

- ・「アジア絣文化圏の形成と琉球・沖縄絣の文化的境位—「絣の起源・伝播・受容・熟成」論的検討のための序章—」（『沖縄文化研究』第31号、法政大学沖縄文化研究所、449-490頁、2004年8月）

飯田 泰三

- ・「＜アジアの中の日本学＞構築の戦略的拠点としての琉球学」（『沖縄文化研究』第32巻、法政大学沖縄文化研究所、301-314頁、2004年）
- ・「丸山眞男の文化接触論・古層論と「伝統」の問題」（『戦後精神の光芒』、みすず書房、234-247頁、2006年）

吉成 直樹

- ・『琉球民俗の底流—古歌謡は何を語るか』（単著、古今書院、227頁、2003年12月）
- ・「琉球王国の成立と朝鮮半島—「おもろさうし」の政治的編纂意図から」（吉成直樹、福寛美、『国際日本学』第1号、法政大学国際日本学研究センター、3-47頁、2003年10月）
- ・『琉球王国と倭寇—おもろの語る歴史（文化の越境12）』（編著、吉成直樹、福寛美、森話社、317頁、2006年1月）
- ・「関係性の中の琉球・琉球の中の関係性」（『国際日本学研究叢書4』、法政大学国際日本学研究センター、55-100頁、2007年3月）
- ・「琉球王権の性格と『おもろさうし』」（吉成直樹、福寛美、『沖縄文化研究』第30号、法政大学沖縄文化研究所、55-111頁、2004年3月）

国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

- ・ 2002年12月6日～8日、法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー26階スカイホール、「日本発信の国際日本学の構築」参加者363名(外国人31名) 樺山紘一、ワディム・クリモフ、クルト・ウェルナー・ラドケ
- ・ 2004年3月9日～12日、法政大学多摩キャンパス100周年記念館、「沖縄のアイデンティティ」、参加者159名(外国人12名)、ローザ・カーロリ、グレゴリー・スミッツ、パトリック・ハインリッヒ
- ・ 2004年10月4日、アルカディア市ヶ谷(私学会館)、「日中の文化関係を考えるー相互認識のずれを中心にー」、参加者135名(外国人23名)、楊棟梁、王 勇、崔 世広
- ・ 2005年3月7日(月)、法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 26階 A会議室、「日中の文化関係を考える」参加者43名(外国人9名)、高原明生、岩崎信彦、王 宝平
- ・ 2005年10月12日、法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー26階A会議室、「東アジア共生モデルの構築に向けてー文化交流とナショナリズムの交錯ー」、参加者63名(外国人22名)、王 新生、羅 紅光、崔 吉城
- ・ 2005年10月31日、アルカディア市ヶ谷(私学会館)、「ドイツ語圏における日本研究の現状」、参加者64名(外国人7名)、モニカ・ウンケル、クリスティアン・オーバーレンダー、アクセル・クライン
- ・ 2005年12月1日～3日、パリ日本文化会館(フランス)、「『日本学』とは何かーヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究ー」、参加者50名(外国人41名)、ジョセフ・キブルツ、ジャン・マリー・ブイス、シュテッヒ・リヒター
- ・ 2006年11月18日～19日、法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー26階スカイホール、「ことばとことばを超えるもの」、参加者98名(外国人15名)、ジョセフ・キブルツ、陸 留弟、島田信吾
- ・ 2006年12月15日～17日、法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー26階スカイホール、「能の翻訳を考えるー文化の翻訳はいかにして可能かー」、参加人数274名(外国人29名)、ロイヤル・タイラー、マイケル・エメリック、ポール・アトキンス

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

・若手研究者研究奨励金

- | | |
|-------|--|
| 対 象 | 法政大学大学院日本文学専攻、日本史学専攻、政治学専攻又は国際日本学研究所の博士後期課程に在籍する学生。選抜は研究計画書の提出により国際日本学研究センター運営委員が審議のうえ決定する。 |
| 実施時期 | 2004年度～2006年度 |
| 具体的内容 | <p>21世紀COEプログラムにおいて求められている教育活動の一環として、優秀な若手研究者を確保し、優れた若手研究者が自由な発想で研究活動を行うことを支援する目的で定められた。</p> <p>各年度の応募を5月中旬に受け付け、国際日本学研究センター運営委員により審査を行い、決定する。審査方法は研究計画書の内容が、COEプログラムのテーマ「日本発信の国際日本学構築」構想との関わりを明確にした上で研究拠点の目的に合致した内容となっているかを審査する。指導教授の推薦書もつける。</p> <p>採用者は研究奨励金として20万円以内の支援経費が実費支給され、その年度の1月末までに論文等を提出しなければならない。提出された論文は、国際日本学研究所紀要「国際日本学研究」に掲載することがある。掲載については国際日本学研究センター運営委員による審査を行う。</p> |

・学術研究員・客員学術研究員の採用

- | | |
|-------|--|
| 対 象 | 本学大学院博士後期課程在籍者 |
| 実施時期 | 1年間の委嘱とする。 |
| 具体的内容 | <p>大学院博士後期課程在籍中で研究テーマが「国際日本学」に連携する優秀な人材を1年の期限付きで学術研究員、客員学術研究員として委嘱する。委嘱期間中は各種研究会、シンポジウムに参加し自身の研究活動をより一層深め、ひいては当研究所の研究活動の研究成果を上げることを目的とする。</p> <p>採用は指導教員の推薦文を含む本人からの申請に基づき、国際日本学拡大運営委員会にて審議のうえ決定する。経済的援助はない。</p> |

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的はある程度達成された

(コメント)

研究教育拠点形成計画全体については、中間評価以降、研究の焦点を絞る努力がなされたが、全体として事業推進担当者相互の有機的な連携を元にした事業の集約化が達成されなかったのは残念である。また、多くの外国人日本研究者を事業推進担当者に加えた独創的なプログラムであったが、事業結果報告書から判断する限り、その特長が拠点形成に十分に生かされたとは言えない。総長直属の国際日本学研究センターにおける人員配置が最小規模にとどまり、本拠点形成に機動的な役割を果たしたかどうか疑問である。全体として、世界最高水準の拠点形成計画という点では不十分な状態である。

人材育成面では、博士後期課程の大学院生が事業年度内に受けた指導及び教育面で必ずしも十分な成果を上げたとは言えない。国際日本学インスティテュートの入学者が創設以来3年間にわたって定員を下回っており、能楽研究の若手育成に一定の成果を上げているものの、拠点全体として国際的な視野をもつ若手研究者の育成に大きく貢献したとは言えない。

研究活動面では、事業開始当初から「国際日本学」の構想を実践する確固とした視点と方法論について十分に掌握されていなかったが、中間評価以降は、メタサイエンス（学の学）を中心的な課題として設定し、プログラムが推進されている。しかし、外国人によるこれまでの優れた日本研究のレビューと新しい学問領域の創成に向けた新しい取り組みという、このプログラムの特長は、未だ十分生かされたとは言えず、今後の更なる努力が望まれる。国際日本学が、日本の歴史・文化・民俗・芸術・政治等の分野における日本研究者コミュニティの組織化を志向するものなのか、あるいは能楽や国際沖縄学研究、対中国観の変遷など、特定の研究領域の新規開拓を拠点形成の核としたのか。後者の研究では事業結果報告書に散見されるように一定の成果を上げているだけに、依然として当初計画との整合性が問われる。

補助事業終了後の持続的な展開については、研究の将来を期待させる萌芽を見据え、設備などの整備がある程度充実した現段階で、真に国際性を備えた国際日本学の構築に向けて、学内連携の強化と若手育成に照準をあてた研究教育活動を重点的に進められることを期待したい。

事後評価結果に対する意見申立て及び対応について

意見申立ての内容	意見申立てに対する対応
【申立て箇所】 ①全体として事業推進担当者相互の有機的な連携を元にした<u>事業の集約化が達成されなかった</u>のは残念である。 【意見及び理由】 ①学外の識者からなる「（第三者）評価委員会」の報告書には、「能楽の国際的視点からの研究のように、今後の有為な展開を期待させるものが発掘できたのは、なかでも大きな成果として評価できる。」とあるが、これも、国際日本学を日本研究についてのメタサイエンスとして捉える、明白な方法意識が確立され、それが事業推進担当者によって共有されたからである。その意味で、事業の集約化が達成されなかったという評価には疑問があると考ええる。	【対応】 原文のままとする。 【理由】 全体として、事業の集約化が達成されていないとの指摘であることから、修正しない。
【申立て箇所】 ②<u>多くの外国の日本研究者を事業推進担当者に加えた独創的なプログラムであったが、事業結果報告書から判断する限り、その特徴が拠点形成に十分に生かされたとは言えない。</u> 【意見及び理由】 ②いくつもの国際シンポジウム、国際研究集会がもたれ、研究成果の共有も行われた。とりわけ、パリでの国際シンポジウム「日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究—」、さらに、国際シンポジウム「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」から能楽の翻訳に繋げ、国際研究集会「能の翻訳を考える—文化の翻訳はいかにして可能か」に至る事業展開は、国際日本学という枠組みの立ち上げと、その枠組みのなかでの新しい	【対応】 原文のままとする。 【理由】 申立ての内容も踏まえた上で、当初、多くの優れた外国の日本研究者を事業推進担当者に加えた特徴が、それらの事業推進担当者の交代などにより、プログラムへの貢献が十分に生かされなかったことを指摘したものであるため、修正しない。

能楽研究の展開を示すものであると自負しているが、それが可能となったのも、外国の日本研究者が事業推進担当者、協力者として参加したことによるところが大きい。	
【申立て箇所】 ③国際日本学が、日本の歴史・文化・民族・芸術・政治等の分野における日本研究者コミュニティの組織化を志向するものなのか、あるいは能楽や国際沖縄学研究、対中国観の変遷など、特定の研究領域の新規開拓を拠点形成の核としたのか。後者の研究では事業結果報告書に散見されるように一定の成果を上げているだけに、依然として<u>当初計画との整合性が問われる。</u> 【意見及び理由】 ③当初にあって構想された諸テーマは、研究の進行とともに、想定外の広がりや深まりを達成するものと、逆に予想外の行き詰まりをきたすものとが並存するのは当然のことである。したがって、後者を取り上げれば、当初計画との整合性が問われるということになるが、むしろ、前者の積極的側面もあることを見落とすべきではないと考える。	【対応】 原文のままとする。 【理由】 「国際日本学」の目指すところが、未だ十分に示されていないために、後者での個別分野の成果が全体の枠組みでどう位置付けられるのかが、不明確であることを指摘したものであることから、修正は行わない。